

1 二月三日(日) 午前八時

2
3
4
5 レンズが大きいサングラスを掛けていた沙綾は、さっきまで付けていたカバのマスクを脇に置いて、アイスコーヒーを飲んだ。僕はそれを見ながら、ホットコーヒーを啜る。

6 「次が、二五分発だっけ？」

7 沙綾の問いに、僕はスマホで探し当てた時刻表を見ながら頷いた。

8 「七番のりばだっけ」

9 「三〇分ぐらいか。結構長いな」

10 「目の前で行ったところだから、仕方ないさ」

11 哲朗くんの家を出てから、阪急の駅前じゃなくて、JRを目指して歩いてきたのがよくなかったらしく、タイミング悪く目の前でバスを逃してしまった。あと五分早く出れば間に合ったのに、その五分が起きれなかった。

12 沙綾はまだ眠そうな顔をしながらも、スツとした姿勢でコーヒーを飲んでいる。

13 「乗る前にトイレには行きたいけど、どこだっけ？」

14 「確か、あつちのビルの中じゃなかったっけ」

15 僕は指で、そこまでの道を差した。このまま、二階のデッキを渡って行った途中、右手のビルに入ったら男女それぞれのトイレがあつたはず。東出口の方にもいくつかあつた気がするけど、どうせバス乗り場は西側なんだし、距離的にも大して変わらないんだから、西側に行けばいい。

16 「そうすると、もうちょっと早く出なきゃダメ、か」

17 「一〇分ぐらいは見ておいた方がいいかもな」

18 「りょ〜かい」
19 沙綾はそう言いながら、再びコーヒーに刺さったストローへ口をつけた。僕もスマホで時間を確かめながら、思ったほど時間がないと思いつながら、コーヒーを飲む。

20 「バスで一回帰るでしょ。それから」

21 「シャワーを浴びて、仮眠を取ろう」

22 「寝なくてもいけるって」

- 23 「いやいや、二時間ぐらいは寝た方がいいって」
- 24 沙綾は不満そうな声を上げる。哲朗くんの家で少し横になりはしたが、睡眠が足りているとは思えない。二日酔いというほどの症状もないものの、バスに乗ってから降りるまでの間に寝たとしても、半日ぐらいは満足に動けないだろう。
- 25 「午前中しつかり寝て、それから動いた方がいいって」
- 26 沙綾はなおも、「えー」と抗議する。バスがある間に帰ろうって何度も言ったのに、始発で帰るとダダを捏ねたのは誰だったわけ？ ついつい意地悪を言いそうになり、言葉を押しさえ込んだ。
- 27 どう説得するか考えているうちに、スマホが震えた。さっき設定したアラームが作動したらしい。カップに残っているコーヒーを慌てて飲む。沙綾はマイペースにストローでぐるぐるするとコーヒーを混ぜている。
- 28 「もう動かないと」
- 29 「え、そんな時間？」
- 30 沙綾は僕に「慌てすぎだよ」と笑って言った。確かに余裕は多めに見ているけど、次のバスを逃せば一時間以上待たなきゃ行けない。僕は沙綾のコーヒーに口をつけて、一気に飲み干した。お腹に冷たいものが入ってくるのを感じながら、グラスとカップを返却口へ運んだ。僕がバタバタしている間に、沙綾はマスクをつけてカバンを持った。僕が「行くぞ」という前に彼女の方から先に店を出た。
- 31 トイレによつて、七番のりばへ戻ってくるまで、ほとんど余裕はない。少し足早に沙綾の手を引いて、デッキの上を歩いた。沙綾が無理なくついて来られる速度で、例のビルへ向かう。
- 32 ちゃんとついて来られているか、不意に振り返って確かめると、沙綾は楽しそうに笑っていた。変な女に引っかけたもんだなと思いつつながら、その変なところをこの上なく可愛いと思ってしまうている自分も、とことん変なんだろうな……。
- 33
- 34
- 35
- 36
- 37

(完)

初出 令和三年一月十九日 NOVEL DAYSにて公開